

万葉からみに湖西

西近江路

琵琶湖の西側を南北に走る西近江路（北陸道）は、畿内と北陸を結ぶ最短路として早くからひらけ、官人や旅人が都へのぼり、あるいは北陸の地へくだって行った重要な交通路でした。高島郡から越前や若狭に抜ける近道として、次の道筋がおもに利用されていました。

その一つは西近江路の三尾から^{ともい}納結（マキノ町石庭）を経て^{あいち}愛発越えて敦賀に出る、いわゆる七里半街道であり、今一つは西近江路を木津（今津町）から^{わかさ}若狭路にはいり、水坂越えて小浜に出る、いわゆる九里半街道がありました。「延喜式」に^{あつ}穴太—^{わに}和邇—^み三尾—^{とも}納結—^{かい}松原（敦賀市）に^{うまや}駅家があったと記されています。

陸路だけではなく、水路による交通もかなり発達して、北陸へは湖東より湖西まわりが多く、ことに物資の輸送などは舟運もよく利用したよう



です。湖西には比良、勝野津、安曇、塩津などの湖港があげられますが、なかでも勝野津、塩津は「延喜式」にも要港として出ており、また万葉の

歌からも、古代の湖上交通の重要な港であったことを知ることができます。

水陸交通の要衝—勝野

水陸交通の要所にあった勝野津は、また大津—塩津間の中継基地的な意味をも持つ港として重要な役割を果たしていました。大津から船出した人々は、勝野津に上陸し、ここから陸路をとり、若狭あるいは越前にわかれて行くか、また逆に北陸から来るなら、勝野津で船に乗りかえて水路、大津へ向かったものと考えられます。「延喜式」の諸国雑物を運漕する功賃の条を見ると、「北陸道、諸国のうち若狭国は、陸路、勝野津 云々」と記されています。このように勝野津は、古くから北国への往還にたびたび立ち寄り、港は旅する人びとの行き来がはげしかったものと想像されます。「万葉集」のなかに、この付近を詠んだ歌が多く残っているのも、この土地が旅人によく知られていたためです。

何処にかわれは宿らむ高島の勝野の原に

この日暮れなば 高市黒人 卷3—275

大御船泊ててさもらふ高島の三尾の勝野

の渚し思ほゆ 卷7—1171

思ひつつ来れど来かねて永尾が崎真長の

浦をまたかへり見つ 暮師 卷9—1733

何処にか舟乗しけむ高島の香取の浦ゆ漕

ぎ出来る船 卷7—1172

大船の香取の海に碇おろし如何なる人か

物思はざらむ 卷11—2436

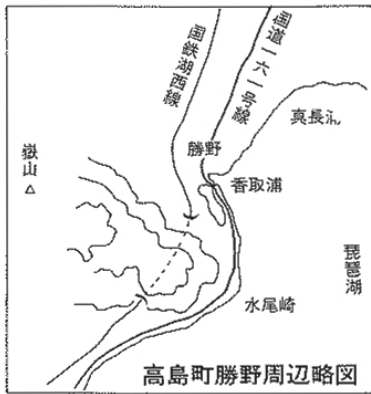
これらの万葉歌は、いずれも作者が旅にて詠んだものですが、陸路の旅であるかあるいは船旅であった時か、はっきりしない歌もあります。歌によまれた「勝野・永尾崎・真長



水尾崎の山上より香取浦、真長浦、勝野の原を望む 下方一乙女ヶ池 遠景一海津大崎、竹生島

浦・香取浦」などの地名(地図参照)は、高島町(旧大溝町)の東南の湖岸にあります。

勝野は陸野、歩野とも書き、現在の高島町



の勝野のことで、「近江輿地志略」に「勝野は打下と大溝との中間をいふ、此辺を勝野原といふ」とあります。

水尾崎は現在の明神崎のこと

で、五位崎とも呼ばれています。出崎に白鬚神社があり、別名を白鬚明神と呼ぶところから、明神崎と名付けられたようです。真長浦は現在の萩の浜のことです。「温故録」に「永田は昔の真長浦をいふにや、今の永田なるべし」とあり、紅葉浦といわれたところかと思われる。香取浦は「鴻溝録」に「大溝町勝野の湖辺を云ふなり」とあります。これは明神崎の北側の深く湾入している入江を指したもので、いわゆる勝野津のことです。明治20年(1887)頃まで船着き場がありました。最近港の一部が埋め立てられて、往時の面影は残っていません。

このほか、高島をよんだと考えられる歌に、次の万葉歌があります。

旅なれば夜中を指して照る月の高島山に
 隠らく惜しも 卷9-1691
 さ夜深けて夜中の方におぼほしく呼びし
 舟人泊てにけむかも 卷7-1225

歌によまれた「夜中・高島山」の地名は、この付近に見当りませんが、歌の情景から想像して勝野津付近が考えられます。

高島山と呼ぶ山は、現在ありませんが、当町の西の嶽山(563メートル)を主峰として東にのび、明神崎で湖に入る連山を高島山と古代の人はよんでいたように思われます。天平宝字6年(762)の「正倉院文書」のなかに「高島山作所」が出ています。高島山はおそらくこの連山をいったのでしょうか。夜中については、地名説と時刻説があってはっきりしない上に、夜中と呼ぶ地名がこの付近にはありませんが、歌の情景から推定すると地名のように思います。それも高島山にそう遠くない地点が浮かびます。万葉の昔、夜の旅の唯一のたよりは月明りであったから、月が山の端に隠れてしまうのを惜しむ気持は、現代の人びとが想像する以上に心細く、辛いものであったはずです。現に高島の勝野から北へ進めば進むほど、山は西に遠のき、見えなかった月までが見えるようになるので、夜中は勝野の付近にあったと見た方がよいようです。「万



勝野の原より嶽山を望む

葉集私注」にも、月齢7～10日頃の月を心に置いて見よとあります。私の観測したところでは、真長浦から香取浦にかけての湖辺が夜中であつたとみた方が歌意にぴったり合っている位置のようです。

安曇の湊

「万葉集」のなかに安曇川をよんだ歌が4首あります。

高島の阿戸白波はさわくともわれは家思
ふ庵悲しみ 卷7-1238
率ひて漕ぎ行く船は高島の阿渡の水門に
泊てにけむかも 高市黒人 卷9-1718
高島の阿渡の水門を漕ぎ過ぎて塩津菅浦
今か漕ぐらむ 小弁 卷9-1734
霰降り遠江の吾跡川楊刈りつともまたも
生ふとふ吾跡川楊 卷7-1293

上の歌は、いずれも船路でよんだ歌です。

安曇は、「万葉集」では阿渡、足速、阿戸、吾跡と書き、今の安曇川町です。安曇川はその水源を京都府の丹波山地に発し、朽木谷を通り、東流して安曇川を経て琵琶湖に注いでい



安曇川の河口(船木崎)

ます。河口の突き出た所を船木崎といい、万葉の人が「阿渡の水門」と呼んでいたところです。すなわち船木崎の南側の小湾のあたりが港になっていたと考えられます。明治になって、いち早くここに船木港が設けられ、定期船が発着していましたが、昭和26年ごろに廃止され、港もすたれてしまいました。

今一つ考えられる所は、南船木のはずれにある内湖(現在干拓田)のあたりです。船泊りにはかっこうな場所のように思います。昔、朽木谷から伐り出された木材は、筏にして安



安曇の湊

曇川を流し、この内湖に運びこまれた、筏の集荷地にしていたほどです。いずれにしても、当時の港は、安曇川河口の南側にあつたものと推定されます。

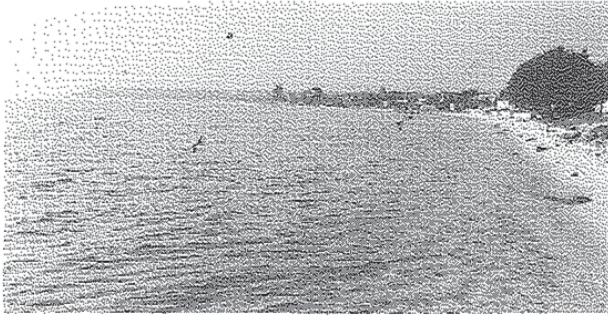
船は風待ちや風波を避けるために寄港し、ここから湖北の塩津や大浦をめざして船出したのです。湖辺に立つと、夜の旅寝の心細さ、辛さがひとしお感じられ、昔がしのばれます。

比良の大曲

高島のところで触れたように、当時北国への往還は陸路も水路もおもに湖西に沿って行くことが多く、次にあげる万葉歌も比良を通った時によんだものでしょう。

わが船は比良の湊に漕ぎ泊てむ沖へな離
りさ夜更けにけり 高市黒人 卷3-274
なかなか君に恋ひずは比良の浦の白水
郎ならましを玉藻刈りつつ 卷11-2743
薬浪の比良山風の海吹けば釣する海人の
袖かへる見ゆ 槐本 卷9-1715
ささなみの連庫山に雲居れば雨そ降るち
ふ帰り来わが背 卷7-1170

比良は「万葉集」では枚、平と書き、今の滋賀郡志賀町比良のことです。「近江輿地志略」の比良村の項に、「南比良、北比良の二村あり、比良山の東の麓なり。比良湊などいふも此地のことなり」といっており、また「滋賀郡誌」には「比良村の東部湖浜風光絶佳万葉集その他古歌に多く詠じたり」と比良の浦を称賛しています。比良浦とは大谷川から比良川にかけて、大きく湾曲している湖辺をいったもので、「比良の大和太」といわれる



比良のおおわだ 北比良より

にふさわしい所です。比良の湊は、現在の比良川の河口の北側にある内湖にあったとも考えられますし、また北比良から比良川にかけての湾曲部にあったとも考えられます。湖西まわりの寄港地だけではなく、対岸の湖東からの舟行も多かったようです。

連庫山は並座山とも書き、比叡山とも比良山ともいわれていますが、拾遺集神楽歌に、
高島や三尾の中山^{さま} 柚立てて作り重ねよ千代のなみくら

という歌があり、高島町の三尾山に近いあたりをいっているのです。比良の連峰をさしているとみた方がよいようです。

また、比良は比良の宮と呼ぶ離宮のあった所でもあります。万葉集の額田王の歌（巻1-7）の左註に、「戊申の年比良の宮に幸すとき云々」とあります。それは大化4年(648)の皇極天皇(女帝)の行幸であり、また「日本書紀」の齊明天皇(重祚)の5年(659)3月の条には「庚辰の日、天皇近江の平の浦に幸す」と記しています。宮処がどのあたりにあったかわかってはいませんが、比良の浦が一望の中に収まる山麓近くにあったものかと考えられます。

真野の浦

真野という地名は全国に多く、万葉歌では摂津説、近江説があって近江であるという決め手となるものはありませんが、地理的な状況から考えていちおう大津市の真野とします。万葉集には、6首詠まれています。

いざ^こ子ども大和へ早く^し白菅の真野の^は榛原
手折りて行かむ 高市黒人 巻3-280

白菅の真野の榛原^は往くさ^く来さ君こそ見ら
め真野の榛原 黒人の妻 巻3-281
真野の浦の淀の^{つぎはし}継橋情ゆも思へや妹が^い夢
にし見ゆる 吹^ふ茨^{あざ}力^{ちから}自 巻4-490
古^{いにしへ}にありけむ人の求め^{もと}つつ衣^{きぬ}に摺りけむ
真野の榛原 巻7-1166
白菅の真野の榛原心ゆも思はぬわれし衣
に^す摺りつ 巻7-1354
吾^{わが}妹子^こが袖をたのみて真野の浦の小菅の
笠を着ずて来にけり 巻11-2771



琵琶湖大橋より真野浜を望む 遠景一比良連峰

真野は、古くから交通の要所として知られた所です。京都の大原から途中越えて真野にはいった旅人は、西近江路を北国へあるいは船で湖東へと出る分岐点にありました。

歌によまれた真野の浦は、古くから和歌、謡曲、屏風絵などの題材となった名勝の地で、現在「真野の入江跡」といわれているあたりが当時の入江の最深部であったようです。「近江輿地志略」に「今は埋まりて田地となれり。浦とも浜ともいへるはこの地のことなり」とあります。また歌の序詞に真野の浦の淀の継橋が使われていたところを見ると、沢部落の一带は淀や沼が点在していて、継橋があちこちに架けられていたものと想像されます。

真野の榛原(萩原)が歌によまれているのは、当時この付近一带に萩が生い茂っていて有名だったようです。「滋賀郡誌」は榛原古跡について、「此地古来榛樹多く皮を剥き衣に摺り染料とす」とあります。土地の古老の話では、明治の頃までこのあたりを「榛原の里」とよんでいたということです。

(安曇川高等学校 藤井五郎氏提供)